



# ウルシ植栽のすすめ

【日本一の漆の里】



# 漆



## ウルシの森を守り・育てる

はじめに

「漆」は、約9千年前から日本人の生活の中で利用されてきました。縄文時代前期のものでは、青森県の三内丸山遺跡や福井県の鳥浜貝塚などから、漆塗りの櫛や土器などが発掘されているほか、縄文時代後期以降になると全国各地の多くの遺跡から、様々な態様の漆器が発見されています。

岩手県でも漆は古来より身近な存在で、二戸市浄法寺町の上杉沢遺跡（縄文時代晩期）からは、漆塗りの石刀や土器が出土しており、二戸地域を含む安比川流域一帯にも縄文時代から高度な漆文化が広がっていたと考えられています。

もともと漆は自然素材で、自生した「ウルシ」の木から樹液を採取し、優れた接着剤や堅牢な塗料として使われだしたのが始まりとも言われ、一旦乾いてしまえば、その塗膜はいかなる酸・アルカリや溶剤にも侵されることはなく、800℃以上のタバコの火にも耐えることのできる極めて丈夫な性質を持っていることが確かめられています。

二戸地方の漆は、「二戸うるし」または「浄法寺うるし」の呼び名で知られ、約1100年前浄法寺町にある古代最北の寺院八葉山天台寺が開かれた頃、この寺の住職が漆掻きを教えたことから始まるといわれ、藩政時代になると南部盛岡藩では二戸地方に「漆掻奉行」を置いて漆の保護増殖に努めました。

明治に入ると、福井県の「越前衆」と呼ばれる漆掻き職人が当地に漆の採取に来るようになり、それまでの「養生掻き」にかわる「殺し掻き法」が伝えられ、現在の漆掻き技術の元を築いたと言われています。

漆器や国宝・重要文化財の修理・修復に欠かせない漆ですが、現在国内で消費されている漆の98%以上が中国からの輸入によるもので、国産漆はわずか2%弱にすぎません。そして、この貴重な国産漆のおよそ80%以上が岩手県産で、その大半が浄法寺地区の漆掻き職人が生産する二戸産です。

しかし、長く続いた国産漆の需要低迷がウルシの木の育成管理を滞らせ、ウルシの木の資源の枯渇が懸念されていることから、二戸地域では、漆掻き職人が自らウルシの木を育てるのはもちろん、官民を上げて漆の森の保全に取り組もうとしています。

日本一の漆産地として、これからも安定した量と品質の漆を生産・供給していくため、ウルシの木の植栽にあたってこの植栽の手引きをお役立ていただければ幸いです。





## 1 「ウルシ」の基礎知識

- (1) ウルシの木の増やし方・・・・・・・・・・ 3
- (2) ウルシの木の植栽・・・・・・・・・・ 4
  - ① 植栽地の選定・・・・・・・・・・ 4
  - ② 苗木の選択・・・・・・・・・・ 4
  - ③ 植栽時期・・・・・・・・・・ 5
  - ④ 植栽時の施肥・・・・・・・・・・ 5
  - ⑤ 植付け作業・・・・・・・・・・ 5
  - ⑥ 植栽本数・・・・・・・・・・ 5
  - ⑦ ウルシの採取時期・・・・・・・・・・ 6
  - ⑧ 萌芽更新・・・・・・・・・・ 6
- (3) 植栽地の保育管理・・・・・・・・・・ 6

## 2 ウルシQ&A・・・・・・・・・・ 7

### 【参考資料】

- I ウルシの掻き取りと用具・・・・・・・・・・ 9
- II ウルシの掻き取り作業・・・・・・・・・・ 10



## 1 「ウルシ」の基礎知識

「ウルシ」と呼ばれる植物は、落葉広葉樹のウルシ科の植物で、二戸地域では、「ヤマウルシ」、「ツタウルシ」、「ヌルデ」、「ウルシ」を見ることが出来ます。

木に傷をつけた時に、そこから分泌、滲出する樹液が実用的に採取できるのは、「ウルシ」の木だけで、日本・中国・韓国・東南アジア諸国に分布し、日本では九州から北海道まで広い地域に分布しています。

日本の「ウルシ」の木は中国と同系に分類されていますが、採取される樹液の量が多く、主成分であるウルシオールも多いことから品質的に優れています。

二戸地域では、藩政時代から植栽が奨励されており、現在でも他地域に比べてたくさんのウルシの木を目にすることができます。

ウルシの木は、樹高は10m、胸高直径が30cmにも生長する落葉高木で、葉の形は一つの葉が一枚ではなく、何枚かに分かれる奇数枚の小葉で、5～9対の互生で構成されています。秋には紅葉しますが、ヤマウルシ、ヌルデが美しく紅く彩るのは異なり黄葉が多いのですが、漆掻きされた場合は紅くなる場合もあります。



ウルシの木の木の花の開花時期は6月～7月で、うすい黄緑白色の花が咲き、風や蜂が花粉を媒介し結実します。結実は小豆粒よりやや小粒の歪んだ扁球形で、中に扁平の種子をつけます。

### (1) ウルシの木の増やし方

ウルシの木のタネは、非常に発芽しにくいタネです。それは堅い果皮を持っていて発芽に必要な水分を吸い上げることができないからです。そのまま播いても、播いた年にはまったく発芽しないか、あるいは長い間かかってぼつぼつと少しずつ発芽し、生育も極めて悪いので、栽培には、まず、苗木の確保が第一となります。

その方法は、①種子から苗木をつくる方法（実生苗）、②ウルシの根を切り取って苗木をつくる方法（分根苗）です。苗木の植栽以外では、③伐採後に根株から出てくる萌芽樹を育てる方法があります。

①の方法は、浄法寺町で古くから行なわれている方法で、漆掻き職人がウルシ樹液が良く出るウルシの木を母樹を選んで結実を採取します。種は堅い果皮を持っているので、そのまま播種してもなかなか発芽しません。このため、種は必ず発芽促進処理を行なって、吸水させて膨らんだ種を播かなければなりません。

②の方法は、親樹の性質をそのまま伝えることが出来るクローン苗を生産する方法です。良い母樹が見つかって、その種根が容易に手に入る場合は価値があります。欠点としては一度にまとまった種根を集めることが困難なことです。

③一度植栽したウルシの木は、2代目以降は根株萌芽更新により成林します。この方法は、ウルシ樹液の採取を終えたウルシの木を伐採して、新しい芽を萌芽させて、それを成長させる方法です。二戸地方の漆掻き法である「殺し掻き」法は、この萌芽更新を前提にした漆掻き技術です。





## (2) ウルシの木の植栽

ウルシの木を植栽する場合は、漆掻きの際にウルシ樹液が良く分泌、滲出してくるための適地の選定や植栽方法、そして、経営目標に注意する必要があります。

### ① 植栽地の選定

植栽地選定においては、すべての条件が満たされているようなところは、まずないので、状況に応じて、いくつかの要点をあげると次のとおりです。

項目	性能	条件
土 壤	肥沃地を好み、乾燥を嫌う	土壌が深く、腐植質の肥沃な土で適湿なところ
	根が好気性	排水の良い砂礫壤土の理化学性のよい所
	中性に近い土壌を好む	強酸性のところを避け、土壌酸度(PH)を6.0～6.5ぐらいに矯正できる所
日 照	他の樹との競争を嫌い、日陰に弱い	畑地や畦畔、林縁などの日当たり、風通しの良いところ
地 形	小尾根の凸部斜面を嫌う	風当たりが強すぎ、土地がやせて乾く
	谷底地を嫌う	土地が肥えて適湿地だが、水はけが悪い
経 営	管理がしやすい	道路がある程度整備され、遠くないところ
	漆掻きや保育作業がしやすい	急斜面でない所
その他	病害発生の未然防止	紫紋羽病に弱い前生植物の栽培地でないこと(クワ、リンゴ、アスパラガス等)



### ② 苗木の選択

苗木の良し悪しは、活着とその後の生育、病害などの被害の発生に重大な影響を与えます。

その年に植栽したウルシの木の初期成長は、前の年に苗畑で苗木時代に蓄えられた力が重要な役目を果たし、その影響は数年間続くからです。

したがって、植栽に当たっては、病気に罹病していない良い苗木を準備してくれる、信頼できる業者に注文しなければなりません。

植栽用の苗木の注意点の主なものは次のとおりです。

- 苗高はあまり高くなく、徒長しない25 cmから40 cmぐらいの苗木。
- 根元径が1 cm以上あって、太くがっしりしている。
- 根は、ゴボウ根でなく、根張りがよく、しっかりした支根が2～3本くらい、細中根が多く、まとまってよく発達している。



### ③ 植栽時期

植栽時期の幅は、秋になって苗木が落葉するころから、翌春開葉する半月から1ヶ月前くらいの間です。

- 春は、3月下旬から4月中旬ころ、目安は、桜の花が咲き始める少し前までには、植栽します。
- 秋は、苗木が落葉するころは、すでに充実した形質の丈夫な苗になっているので、掘り取られた苗をすぐ植栽します。

### ④ 植栽時の施肥

植栽当年のウルシの木の生長の経過は、苗畑で床替えした苗と同じ状況であると考えられます。

このことから、上長生長を盛んに行なう生育初期の4月～5月に窒素とリン酸、肥大生長の盛んな生育後期の7月～8月にリン酸、カリ、石灰の要求度が高いと考えることができます。

これらの肥料がそれぞれの時期に不足しないように施肥の計画を立てて、実施してください。

### ⑤ 植付け作業

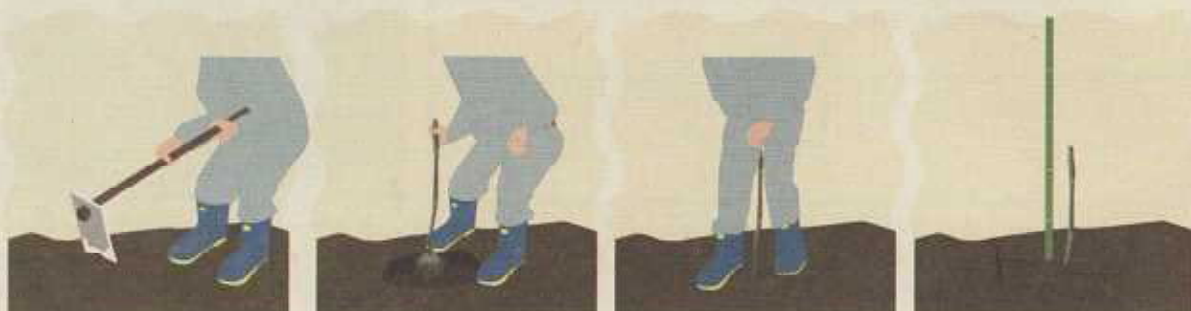
ウルシの木の植栽には、いねいな植え付けが大事です。

植え付けの例は、図のとおりです。深さ35cm～50cm程度の植え付けるところを畑地のように耕うんして、1本1本環境を見て不足したものを補ってやりながら、やさしい思いやりを込めて植えてやることです。植え終わったあとウルシ苗の地際部が元々の地盤より低くならないように注意し、苗木の根が正常な形になるように、いねいに植え付け、根元付近がいくぶん中高になるように土を埋め戻したあと、十分に根固めします。

忙しい思いをしながら、あわてて大面積に短期間に一斉に植栽するより、適地にだけ、小団地ずつ、あまり経費をかけずに、自家労力の範囲内でいねいに植えることが大切です。

行き届いた管理をして良い林をつくり、小団地の林が集まって大きな面積の植栽林になるように計画したほうが適した植え付けです。

この小団地の考え方を漆掻き職人に確認すると、1日で漆掻き作業ができる本数の100本（「一日山」）が植栽の目安です。



「とが」で土を掘るときは手前から廻り、土を寄せるときには斜めに傾ければ効率が良い

10cmくらいの深さに土を掘り、苗を置く。その際、苗の先を手で、根は軽く足でおさえ、まっすぐに植える

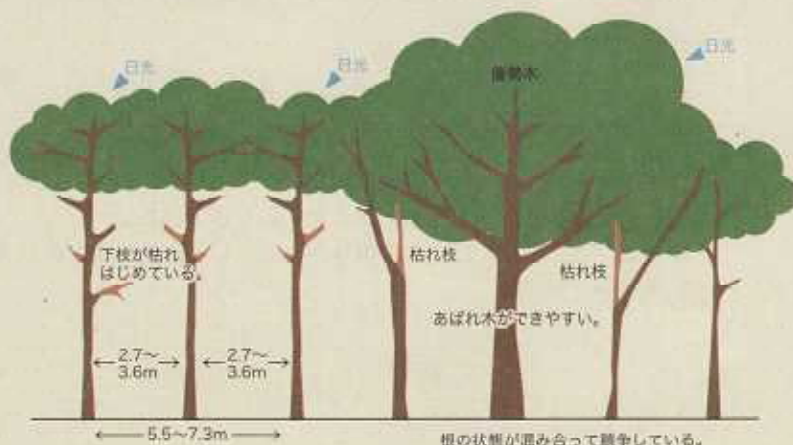
土をかぶせ、軽く土を踏みながら一周する

軽く土をかぶせ、刈り払いのときの目印に竹をさしておく

### ⑥ 植栽本数

図は、競争し合っているウルシの木の林を示したものです。

ウルシの木は被圧の影響を受けやすく、少しでもお互いに触れ合い、被圧され始めると共倒れ的に枯死の道をたどるか、いったん優位に立つとより強力な樹に押さえられるまで暴れて枝を拡張してしまうか、優劣がはっきりする樹だといえます。





スギのように1ヘクタール当たり2000本～2500本くらいの密植では、早い時期に競争が始まり、互いに被圧され樹の幹は太くありません。

1ヘクタール当たり1000本～1200本を植栽したウルシの木であれば、20年前後で品質の良いウルシを掻き取ることができるとされています。

また、林地に植栽した場合は植栽経費や植栽年を含んだ5年間の下刈経費への助成金（森林整備事業補助金）が活用できます。補助対象は1ヘクタール当たり1000本以上ですから、植栽本数は1,200本を目安に植栽します。

**【参考】**

植付け間隔と1ヘクタール当たりの植付け本数

間隔(m)	2.6	2.7	2.8	2.9	3.0	3.1
本数(本)	1479	1371	1275	1189	1111	1040

**⑦ ウルシの採取時期**

ウルシの木は、木材としての商品価値は今のところほとんどありません。

ウルシの木は、立木のまま1本1本幹に傷を付けて徹底的にウルシ樹液を採取するために植栽されます。

したがって、ウルシの木が何年生くらいになって、どのくらい大きくなったときにウルシ樹液を掻き取るかを確認しておく必要があります。

ウルシの木は、殺し掻きと萌芽更新を繰り返すことである程度連続的に採取できるわけですから、良いウルシ樹液をより多く採取することを考えて、採取時期（販売時期）を決めておき、そこまで大きくする必要があります。

**⑧ 萌芽更新**

掻き取りが終わったウルシの木は伐り倒し、切り株や根から出てくる萌芽樹を育てて更新します。

苗木代や植え付け費がかからず、下刈などの保育管理費だけですみ、また特に初期生長がよいので、次の漆の掻き取りを行うまでの年数が2～3年は早くなります。



**萌芽更新の注意点は次のとおりです。**

漆の掻き取りが終わった後は伐り倒します。通常は漆を掻いた職人さんが適切な時期に伐り倒してくれますが、事前に相談しておきましょう。

ウルシの木の萌芽樹は、切り株から60cmくらいのところまで多く萌芽します。切り株から出る萌芽樹は太くて丈夫なものを選び、他は切り取ります。親株から離れたところに出た萌芽樹の場合は良いものを数本選んで、他は切り取ります。その後、生育の見通しがついたら前後の配置を考えて1本に調整します。

**(3) 植栽地の保育管理**

ウルシの木の植栽地は、スギやアカマツ、カラマツなどの一般造林木と違い、元来、人里近くで栽培的に管理して育てられる木であることを認識する必要があります。

① 植栽地は、生い茂る雑草類の刈り払いを怠ると、よいウルシの木は育ちません。

② 下刈り作業は、ウルシの木がまだ大きくない植栽後4～5年くらいまでに、在来の雑草やかん木類に負けないで育つよう、必ず全面的な刈り払いを行います。

また、成林してウルシを掻き取れるようになるまで、つる類の除去や穿孔虫類の被害を少なくするために、必要に応じて行なう根元周辺の清掃的な刈り払いを行う必要があります。

③ 下刈りの時期は、ウルシの木の上長生長期の5月～6月上旬と肥大生長期の7月～9月ごろです。雑草に被圧されて負けないよう、十分生長させてやることを考えて行います。





## 2 ウルシQ&A

### Q1. ウルシの苗木はどこで買えますか？

ウルシ苗木の生産者は浄法寺町に在住していますが、現在は浄安森林組合が注文を受け付けています。

### Q2. ウルシを育てるのに必要な費用はどのくらいですか？

苗木代のほかに、山林（林地）に植栽する場合は地帯えの経費が掛かります。

### Q3. ウルシの植栽や保育に助成制度はありますか？

0.1 畝（1反歩）以上の山林（林地）に、1 畝当たり 1,000 本以上植栽した場合は植栽経費と植栽年を併せて5年間の下刈りに要する経費に対する助成制度があります。（森林整備事業）

農地に植栽する場合は、事前に農地転用の手続きをしてから植栽した場合に助成の対象になります。

その他、市町村によっては独自に助成制度を実施している場合がありますので、担当部署にご相談ください。

### Q4. ウルシにかぶれるということはどういうことですか？

ウルシかぶれは、医学的には「接触性皮膚炎」と呼ばれる「かゆみ」を伴う皮膚の炎症で、ウルシの主成分である「ウルシオール」という物質に接触することで反応するアレルギー疾患です。

かぶれ易い人、かぶれにくい人がいますが、ウルシの木には木全体にウルシオールが含まれていますから、ウルシの木に近づいただけでかぶれるという人もいますし、全くかぶれないという人もいます。

### Q5. ウルシの木を売りたいときはどうすればいいですか？

漆掻き職人の目に留まっていれば、手頃な大きさになってくると話ができますが、話がこないようなら漆掻き職人が組織している岩手県浄法寺漆生産組合に相談してください。

#### 【連絡先】

事務局：tel.0195-38-2933

### Q6. 漆の木が病虫害にかかったようです。どこに相談すればいいですか？

県の林業改良普及員に相談してください

### Q7. 漆が病虫害にかからないようにするにはどうすればいいですか？

適地に植栽することや、下刈りなどの保育作業を実施してください。

### Q8. 漆液を採る以外にウルシの木の活用法はありますか？

ウルシかぶれの心配もあり、現在は活用されている例はほとんどありません。

以前は、軽さと水に強いという特徴から漁網用の浮きに使用されていましたが、現在は活用されていません。

### Q9. ウルシの木が真っ直ぐ上に伸びず横に広がります。どうすればいいですか？

ウルシの木の植栽密度によって調整可能です。

スギのように枝打ちする方法もありますが、たくさんの枝と葉は光合成に必要です。したがって、枝打ちは掻き取りに邪魔になるか、枝どうしが競合し合い、生育に支障を生じないかざりは、急いで切る必要はありません。





## Q10. 良い漆が採取できる木とはどんな木ですか？

漆掻き職人の間で云われてきた、ウルシ樹液の良く出る木と出ない木の比較

●良く出る木	●良く出ない木
モチ肌（黒肌木）	ナシ肌（白肌木）
雄木 孤立木（疎立木） 日向地の木 広葉樹の中の木 枝つきが鈍角で、枝間が短くて、太い 枝が広がり、枝下が短くて、太い 二又木	雌木 密植木（被圧されはじめた木） 日陰地の木 針葉樹の中の木 枝つきが鋭角で、枝間が長くて、細い 枝が広がらず、枝下が長くて、細い すらりとした木

上表でいう漆樹液の良く出る木は、土壌や日当たりなどの立地環境が良く、枝を十分広げて伸び伸び育った木ということですので、そうなるように植栽し、管理していけば良いことになります。

## Q11. 漆液は何年くらいで採取できるのですか？

ウルシの木の直径が大きいものほど採取できる量が多いのですが、ウルシの木の肥大生長が下降しはじめるのは17年くらいからといわれています。樹勢が衰えない経済的にも適期として目安になりますが、直径では15cm～20cmくらいから採取時期の目安とされています。

## Q12. 漆を自分で掻いてみたいのですがどうすればいいですか？

漆の採取は、ウルシの木にキズをつけながら、キズ口を治して回復させる休養期間を与えながら良いウルシを分泌させる難しい作業です。漆掻き職人に教えてもらいましょう。

## Q13. 漆を伐採した後から芽が出てきました。放っておけば、いずれ採取できますか？

切り株から出る萌芽樹でなく、親株から離れたところに出た良いものを数本選んで他は切り取ります。その後、生育の見通しがついたら前後の配置を考えて1本に調整します。

ウルシを採取できるまで大きくするには、下刈りなどの保育作業をしなければ、在来植物に負けてしまいます。

## Q14. 自分で植えるのは大変なのですが、誰かに頼めるのでしょうか？

林地に植栽する場合は、森林整備事業などの助成制度を活用できます。森林組合に依頼することもできますので、最寄の森林組合に相談してください。





【参考資料】

I ウルシの掻き取りと用具

ウルシの樹液はウルシの木の葉や枝、根など全体に含まれていますが、漆掻き職人は、主に幹の部分からウルシを採取します。表皮と材部との間にウルシの通る道（漆液溝）があり、ウルシは、この漆液溝を遮断するように横溝（キズ）をつけるとウルシの樹液が分泌されるのでこの液を採取します。

この樹液を採取することを「漆掻き」といいます。

(1) 採取の時期

10年生以上で直径が10cm以上になったころから採取を始めます。

(2) 採取の期間

樹液の流動している6月中旬～9月いっぱい（辺ウルシ）、10月（裏目ウルシ）

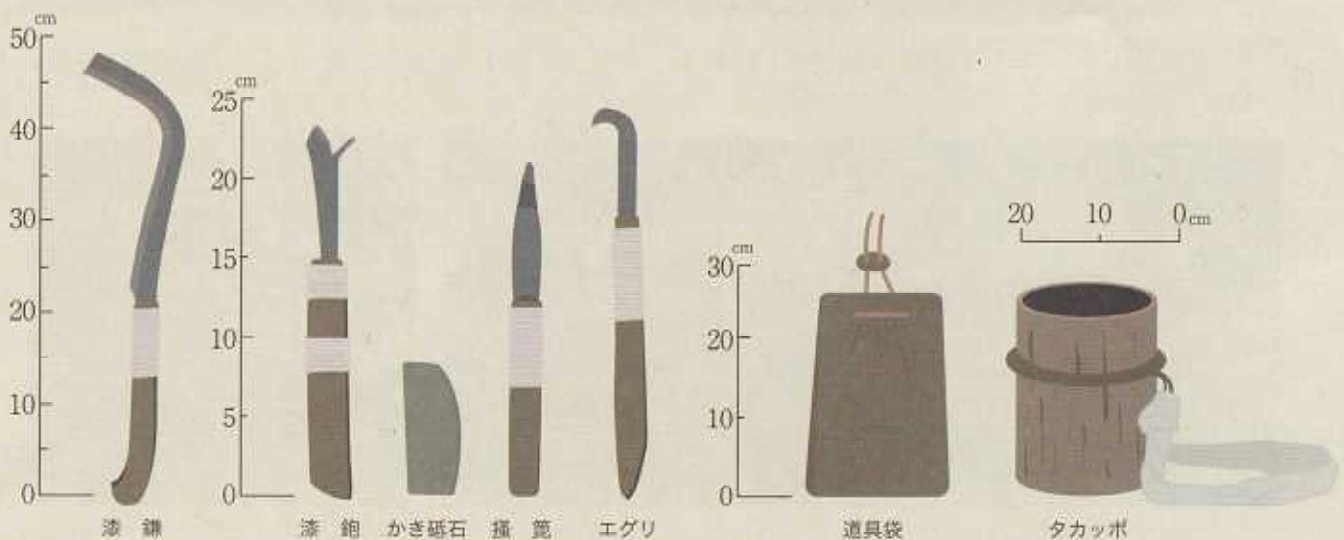
(3) 採取の方法

二戸地方では「殺し掻き」法という1回（1年）の採取期間にすべてかき取り、伐倒する方法で採取します。

(4) 漆掻きに必要な主な用具

道具の名称	使 い 方
漆鎌（ウルシカマ）	粗皮を削って幹の表面をなめらかにします。
漆鉋（ウルシカンナ）	先端が二又になっていて、一方はかき溝をつけるための刃、他の一方は、掻き溝の中央部に溝と平行に筋を引いて、うるし溝を完全に切断するための先のとがった「目刺し」がついています。
エグリ	堅くなった樹皮を削る漆鎌の代わりに裏目掻きの作業から使用する道具。
掻籠（カキヘラ）	溝の中に分泌した液をかき集めます。
タカッポ、樽（カキタル）	掻籠で掻き集めたウルシを入れる容器

かき取り用器具





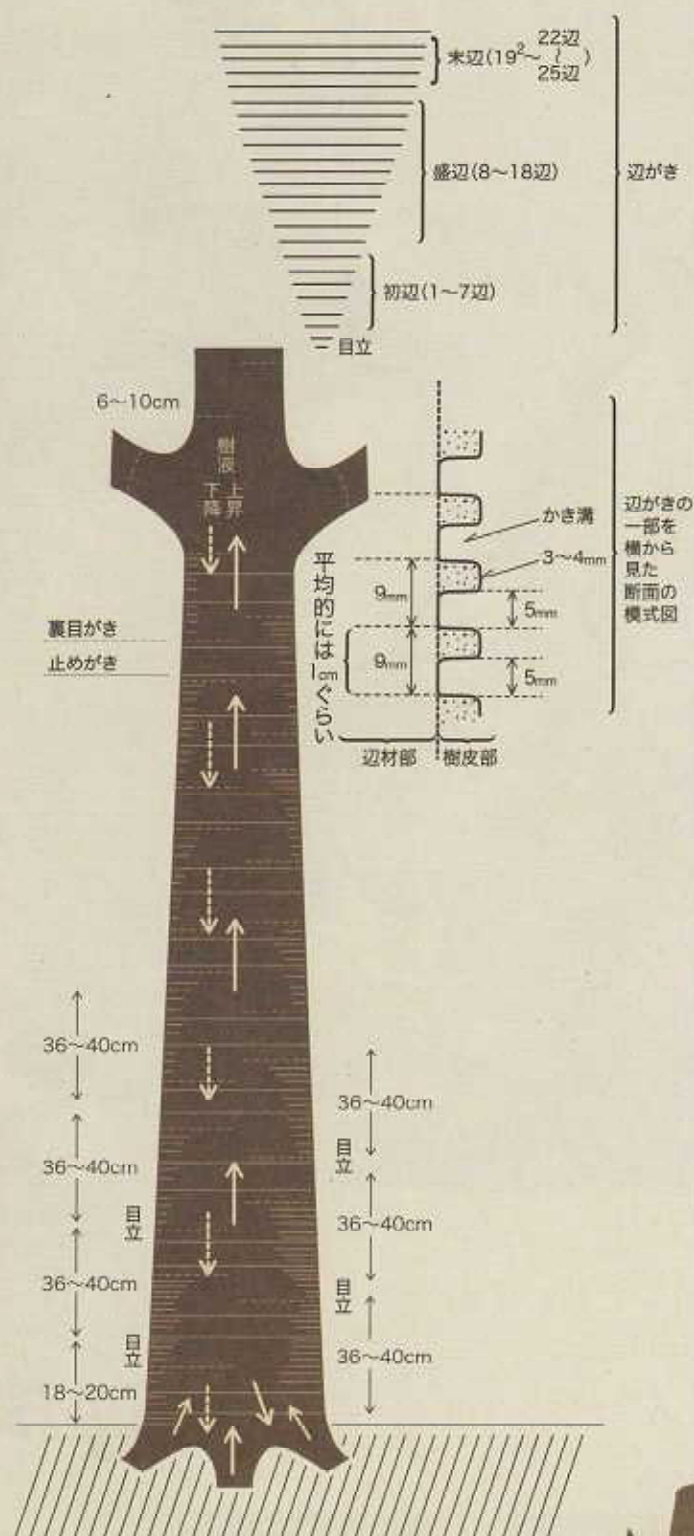
## II ウルシの掻き取り作業

一般的には漆掻き職人は年間一人当たり 400～500 本のウルシの木から漆を採取します。木の大きさや木の善し悪し、あるいは技量によって収穫高は大きく異なりますが、辺漆（ヘンウルシ）20 貫目（75kg）を採取すれば一人前といわれます。

### ウルシ掻き取りの手順

手順	内容
原木の確保	漆掻き職人は、日頃からウルシの木の場所を探しておき、手頃な大きさになるとそ所有者と交渉して購入します。良い木を確保し、より収益を上げることが出来るかどうかが決まる訳ですから、時には漆掻き職人同士が競い合うこととなります。
山入り	その年に掻き取るウルシの木の本数を決め、それを場所や地形などを考慮しながら4等分して4日間ですべて回れるようにします。（「四日山」） これはキズが付けられたウルシの木に回復期間を与え、より多くのウルシが採取できるようにするための工夫です。漆掻きのために周囲の刈払いも行われます。
目立て	入梅の頃、根元から 20 cm ほどの高さの幹に 2 cm 位の横溝をつけ、この溝を基準として上方へ約 30～35 cm ごとに同じ溝をつけていき、反対側の幹にもこれと交互するように溝をつけていきます。 目立てはウルシの採取そのものが目的でなく、2 回目以降の辺掻きの基準を決めると同時にウルシの木に刺激を与えてウルシの分泌を盛んにするために行います。
辺掻き （ヘメカキ）	四日山であれば、五日目ごとに前につけた掻き取りキズの上に少し長めのキズをつけます。 キズから滲み出たウルシはヘラですくい取られ掻桶に入れられます。 辺掻きは 9 月下旬頃まで行われますが、この時期に採取されたウルシを辺漆といい、さらに辺漆は初辺、盛辺、末辺に区分され、それぞれ性質が異なります。
裏目掻き （ウラメカキ）	辺掻きが終わると、目立ての下と辺掻きの上に幹を半周するキズをつけ、また幹の上方や太めの枝にもキズをつけます。 こうして採取されたウルシは裏目漆と呼ばれますが、辺漆に比べて品質がやや劣るといわれます。
止掻き （トメカキ）	止掻きは裏目掻きと裏目掻きの間にもキズをつけ、木を一周するようにキズをつけて採取します。 止掻きはその名の通り樹液の流れを完全に遮断してしまう方法で、「殺し掻き法」の名の由来の作業です。

### かき取りの傷付け方模式図



※以前は、「枝掻き」「根漆」の作業もありましたが、採算が合わないという理由で止掻きとともに現在は行われていませんし、裏目掻きを行う職人もわずかとなっています。







＝お問合せ先＝

岩手県 県北広域振興局 農政部  
二戸農林振興センター 林務室

〒 028-6103 二戸市石切所字荷渡 6-3  
Tel 0195-23-9204 Fax 0195-25-5652  
E-mail BL0004@pref.iwate.jp



JOBOJI *Japan*

浄法寺漆

じょうぼうじしるし

この冊子は、二戸地方振興局(林務部)が平成21年度地域振興推進費で作成したものです。



岩手の林業は国産材の供給を  
確保しています。